

## 『新約聖書』における「魂」(psyche)の觀念 「内面」の誕生の思想史への一試論

著者	仲島 陽一
著者別名	Yoichi NAKAJIMA
雑誌名	国際地域学研究
巻	20
ページ	83-92
発行年	2017-03
URL	<a href="http://id.nii.ac.jp/1060/00008766/">http://id.nii.ac.jp/1060/00008766/</a>

# 『新約聖書』における「魂」(psychē)の観念

## ——「内面」の誕生の思想史への一試論——

仲 島 陽 一\*

### 一. 本稿の課題と手法

「キリスト教」において「魂」の観念は本質的であり、この宗教の核心を「愛」とともに「魂」という言葉においてみられるという印象を持つ者が多いであろう。少なくとも（キリスト教徒でなくその専門知識もない、いわば「ふつうの」日本人にとっては、「贖罪」や「復活」よりもこれらがまず頭に浮かぶのではなかろうか。しかし「魂」とは何かということはなかなか難しい。キリスト教で言う「魂」とはそもそも何なのか、これがまず問題にしたいことである。この問題はキリスト教理解にはむろん必要ではあるが、私としては、（さしあたり西洋において）「内面」という観念の発生と展開という、さらに大きな問題意識の一環である。その際「キリスト教」の「魂」の観念は重要な結節点の一つと予想される。よってその研究となるが、「キリスト教」全体にわたっていきなり調べることは不可能なので、その出発点である『新約聖書』を考えることにする。そしてその方法としては、いま日本語で「魂」としたものに当たると考えられるギリシャ語 psychē がどのように使われているか、ということからこの観念内容をできるだけ明らかにし、その特質を考察することにしたい。この方法の限界や問題点はおいおい述べることにするが、題目が示すところをあらかじめ述べれば以上となる。

### 二. 「psychē」の多義性

『新約聖書』において、「psychē」の語は明らかに多義的に用いられている。

まずそれを五つの語義に分けておきたい。

第一は、「生命」とほぼ同義であり、特に生命原理としての「息」を意味するところや、「生物」とほぼ同義であるもの。

第二は、「魂」を持ったものとしての人間個人。

第三は、感情の座としての「心」ないし「魂」。

第四は、宗教的および道徳的意識の座としての「魂」。

第五は、非物質的原理としての「魂」。

第六は、「内面」または再帰的な「自己」。

それぞれの場合に当てはまる主な個所を引用しておく。以下で下線部は psychē に当たる語であ

\* 東洋大学国際地域学部：Faculty of Regional Development Studies, Toyo University

り、後にも言及する引用句は斜字体にして引用句番号を付けた。どこに入れるか迷うものもあり、私のさしあたりの解釈による暫定的な区分である。

第一について。「この子の命を狙っていた者どもは死んでしまった」(マタイ 2:20)。「安息日に許されているのは〔…〕命を救うことか、殺すことか」(マルコ 3:4)。「自分の命のことで何を食べようか何を飲もうかと、また自分の体のことで何を着ようかと思悩むな」(同 6:25)。ここでは psychē (命) が soma (体) と並べられているが、文字通り並立であって対立ではない。「あなたがたの中には殺される者もいる。〔…〕しかし忍耐によって、あなたがたは命を勝ち取りなさい」(ルカ 21:19)。「よい羊飼いは羊のために命を捨てる」(ヨハネ 10:11)。「自分の命さえ喜んで与えたい」(テッサロニケ前 2:8)。「魂のない肉体が死んだものであるように、行いを伴わない信仰は死んだものです」(ヤコブ 2:26)。

第二について。「ペテロの言葉を受け入れた人々は洗礼を受け、その日に三千人〔三千の psychē〕ほどが仲間に加わった」(使徒 2:41)。

第三について。「見よ、私の選んだ僕。私の心になつた愛する者」(マタイ 12:18、旧約の引用)。「気持ち [kardia] を尽くし、心を尽くし、思い [dianoia] を尽くして、あなたの神である主を愛しなさい」(同 22:37、一部旧約の引用)。「私の心は死ぬほど悲しい」(同 26:38、ゲッセマネでのイエスの言葉)。

第四について。「あなたがたは自分の心に安らぎを得よう」(マタイ 11:29)。「信じようとしないうダヤ人たちは、兄弟たちのもとでそれらの国民の心を悪くし扇動した」(使徒 14:2)。「あなたがたの心を騒がせた」(使徒 15:24)。「うわべだけで仕えるのではなく、心から神の意志を行い」(エフェソ 6:6)。「あなたがたの霊も魂も体も欠けたものがないものとして守り」(テッサ前 5:23 [引用 9])。

第五について。「体は殺しても魂を殺すことのできない者どもを恐れるな」(マタイ 10:28 [引用 1])。「私はあなたがたの魂のためにおおいに喜んで自分の持ち物を使い」(コリント後 12:15 [引用 2])。「この希望は魂にとって頼りになる」(ヘブライ 6:19 [引用 6])。指導者たちは「あなたがたの魂のために心を配っています」(同 13:17 [引用 7])。「御言葉はあなたがたの魂を救う」(ヤコブ 1:21 [引用 3])。「その罪びとの魂を死から救い出し」(同 5:20 [引用 4])。「あなたがたが信仰の実りとして魂の救い [soter] を受けている」(ペテロ前 1:9 [引用 5])。「あなたがたは真理を受け入れ魂を清めた」(同 1:22 [引用 8])。「魂にたたかきを挑む肉 [sarx] の欲を避けなさい」(同 2:11 [引用 13])。「あなたがたは魂の牧者であり監督である方のところに戻って来たのです」(同 2:25)。「真実である創造主に自分の魂を委ねなさい」(同 4:19)。「あなたの魂が恵まれていますように」(ヨハネの手紙 3、2)。「殺された人々の魂を」(黙示 6:9)。「首をはねられた者たちの魂を見た」(同 20:4)。

第六について。「こう自分に言ってやるのだ」(ルカ 12:19 [引用 10])。

### 三. 辞書の見解

『岩波キリスト教辞典』では「魂」を引くと「靈魂」をみよとなり<sup>1)</sup>、「靈魂」の項目<sup>2)</sup>にまず

次のように記されている。「聖書では、人間は靈魂と身体とに二分されず、神から与えられる命の靈によって生かされる具体的存在と考えられている。キリスト教の靈魂観は、靈魂と身体との結びつきを本性的とする点ではこれを継承しつつも、哲学的靈魂論の影響を受けて、人間の理性的靈魂が非物質的な人格存在として身体を離れても存続するという考えを強調するにいたった」。さっそくいくつかの疑問が生じる。引用内の第一文と第二文の関係からは、まるで「聖書」が「キリスト教」に属さないかのようであるが、これは第二文が「聖書以後のキリスト教」の意であると解釈しておこう。だが本稿の前節でみたように、聖書そのものの中にも「靈魂」を「非物質的」で「身体を離れても存続する」ものとしてとらえているところは明らかにあると考えられる。よって私はこの記述をすぐには受け入れられないが、それでもそこにある問題意識として、次のことをとりあげることが必要と考える。すなわち非物質的靈魂観は（『聖書』にはあるが）ユダヤ教やイエスの思想には疎遠なもので、ギリシャ哲学の靈魂論の影響によって、「キリスト教」の形成史のなかでつくられたのかもしれない、という論点である。この辞典の、「聖書」と題された次の段落では次のように記述される。旧約聖書では「魂が靈的な存在として、死を超えて生き続けるという考えはない」というのをどうやら「基本的な意味」として（ただし「知恵文学では、死んで陰府に下った魂が語られるが、それは命から完全に切り離されたものである」と言う）新約聖書でもこれを「引き継ぐ」とする。「一方で、おそらくグノーシスなどヘレニズム思潮に見られる二元論的語法を反映して、魂と身体との区別や靈と肉との対立なども語られる。しかしその場合でも靈的人間に対立する肉的人間が魂的人間と表現され、また死者の復活においても、死すべき魂的身体にかわる永遠の靈的身体が復活するとされるように、靈魂と身体との対立ではなく、人間全体の自然状態としての命・魂とこれに新たな命を与える神の靈との関係が問題になっていると考えられる」。この辞典の次の段落は「神学・哲学的展開」と題され、こう始める。「教父たちは、全体としては聖書的人間観にとどまりつつも、ギリシャ哲学の靈魂観を援用して、人間の靈魂が身体に依存しない靈的存在であることを強調し、靈魂を神の像としての人間存在の中心に据えた」。以下歴史をたどり、次のようにしめる。「技術的支配の貫徹した現代文明の中で、靈魂論は、唯物論的・機械論的説明や心理学的解釈の中に解消されてしまったかに見えるが、人間の生死に物質的意味以上のものを見出そうとする際に、人間が身体的存在であると同時に、靈的な世界をも生きるものであるという聖書本来の人間理解が見直されてきている」。

#### 四. 実体としての「魂」

『新約聖書』における「魂」の語に関して、私達がまず気づいたのはその多義性であった。これをどう考えるか。たいていの語は多義的であり、この文書においてもそうなっているだけなのかもしれない。一般的な希英辞典<sup>3)</sup>をみても psychē は次のように複数の英語で分析されている。「I breath esp.as sign of life. II the soul of man,as opp.to the body.1.in Homer only a departed soul,spirit,ghost,which still retained the shape of its living owner. 2.generally the soul or spirit of man. 3.also as the seat of the will, desires,and passsions,the soul,heart. III the soul,mind, reason,understanding.」しかしこの場合もそうであると即断する前に検討すべきことがある。『新

約聖書』は複数の記者からなっており、記者による意味の違いがみられないかを、検討すべきであろう。

私は語義を六つに分けたが、最も問題にすべきは第五と第六であろう。

第五についてみると、まず注目されるのが、福音書とパウロ書簡では少なく、多くがパウロ以外の書簡の部分にあることである。

そこで福音書にある【引用1】について考えてみる。まず「体」と対比されており「命」の意味ではとれず、「魂も体も地獄で滅ぼせる方を恐れなさい」と続き、精神作用の基体というより実体であり、第五の意味であることが確認される。ところでここにルカに並行句があるので、Q資料によると考えられる。そちらでは、「体を殺しても、その後、それ以上何もできない者どもを恐れてはならない。誰を恐れるべきか教えよう。殺した後で、地獄へ投げ込む権威を持っている方だ」(ルカ12:4-5)となっている。多くの場合そうであるように、ここでもルカのほうが原型に近いと考えられる。「殺した」つまり体を滅ぼした「後で、地獄に投げ込まれる」ものを「魂」としてマタイが補ったものであろう。ユダヤ的伝統との連続性を強調するのがマタイの傾向であるので、これもその一つかと思いたくなる。しかし前にみたように、旧約聖書では「魂が霊的な存在として、死を超えて生き続けるという考えはない」というのが「基本的な意味」だという。するとこの編集句は、イエス以前でなくイエス以後の観念から遡及的に加えられたものであろう。するとルカにおいて殺された「後で、地獄に投げ込まれる」ものは何か。身体そのもの、あるいは「魂」と実体的に区別されない身体であろう。

こうなると私達は大きな問題に出会う。つまりこの【引用1】における「魂」がマタイの編集句であるなら、イエス自身の言葉には「実体としての魂」の観念はみられないのではないか、ということである。おそらくそうだと私は答えない。これに対し、語として「魂」が現れなくてもその観念はあり得る、という反論があろう。たとえば次のような句においてである。「人はパンだけで生きるものではない、神の口から出る一つ一つの言葉で生きる」(マタイ4:4【引用11】)。「口に入るものは人を汚さず、口から出てくるものが人を汚すのである」(同15:11【引用12】)。ここにみられるような観念を私は「霊肉の事象的対立」と呼ぶことにし、「霊肉の実体的区別」の観念と区別することにしたい。

次にパウロではどうか。第五の用法としては【引用2】だけを挙げておいた。しかし文脈を見るとこれは「肉体」とでなく「財産」との対立である。自分の訪問が財政的負担をかけないと言い、「私の求めているのは、あなたがたの持ち物でなくあなたがた自身だからです」(コリント後12:14)と言う。これはむしろ第六の語義に入れるべきかもしれない。

以上のことから私はこういうべきことになる。「霊肉の実体的区別」による「魂」の観念はイエスにもパウロにもない、と。

## 五. 非物質的実体としての「魂」

パウロ以外の書簡を見ると、逆に、第五の語義でとりたいた「魂」の語が多い。(なお「ペテロの手紙」の記者は使徒ペテロとは別人と考えられている<sup>4)</sup>)。ではその場合に何が問題にされている

のか。まず目につくのが、「魂の救い」が述べられることである（[引用 3] [引用 4] [引用 5]）。では「魂の救い」とは何か。[引用 4] をみると、それは「死からの」救いであるように思われる。肉体はすでに死んでいるのだからいわゆる「第二の死」であり、これは黙示録における「魂」の観念とも連続する。そしてこれはアウグスティヌスも特に問題にしたものであり、「キリスト教（神学）」における重要な観念として定着したものとも言えよう。ここで私達たちはいろいろな問題に出会う。

まずこの「第二の死」とは何か、またなぜそれからの「救い」とは何であるのかである。「魂もなくなる」、完全な無になる、ということがなぜ悪いことなのか、（とりわけ非キリスト教徒の東洋人には）わかりにくいからである。

次に、「魂の救い」がこの「第二の死」からの救いであるならば、それはキリスト教的な意味で「永遠の命を得る」ことと同義とも考えられる。ここで私は本稿の検討に不備があったことに気付く。すなわち「魂」の観念を考察するのに psychē の語をあたってきたわけだが、ふつう「命」と訳される zōē もみる必要があったろうということである。さしあたりさきの辞典をみると、次の記述がある。「新約聖書では自然的・身体的命をさす場合には psychē、神からの終末論的な賜物としての救い（永遠の命）をさす場合には zōē の語が使われる」<sup>5)</sup>。この psychē は本稿で第一の語義としたものにあたる。しかしなぜこの使い分けがなされ、「永遠の魂」とは言われないのか。その理由としてのように、psychē 「はもちろん神によって造られたものではあるが、自然的生命体としての命をさす」<sup>6)</sup> と、この項目の筆者が他の項目「永遠の命」で記しているが、別の（第五の）語義もあることを私達はみてきたので、すぐには納得できない。

さらに、このような「永遠の命」としての「魂の救い」が、明示的にイエスの教えにないとしても内容的に属するものと考えられるかどうかの問題がある。そう考えるのはかなり難しいであろう。イエスの「福音」の内容は直接には「神の国」の到来であり、これは第一には終末論と結びついたよりこの世的なものであり、第二により社会的な出来事であって、個々人が死後にその「魂」の救いを得るという、後の信仰内容からイメージされるべきではなからう。

第五の語義の「救い」関連外の用例に戻って [引用 6] はどうか。「希望」と結びついており、その内容を文脈でみると、単に世俗的感情として喜べる「希望」でなくやはり「魂の救い」のそれであると考えられる。[引用 7] についても同様である。[引用 8] は魂を「清める」(agnizō)、および次の「清い」(kathara) 心 (kardia) といった用語から、ヘレニズム的な「魂のカタルシス」観念との関連が気になってくる。そしてそこに引き付けて解釈したくなる要因がある。霊肉の実体的区別がユダヤやイエスの観念でないなら、それはヘレニズムからの流入ないし影響となる。魂の清め（カタルシス）の観念は、オルフェウス宗教からピュタゴラス教団を経てプラトンにはいっていくものなので、初期キリスト教への影響が問われてよいであろう。しかしこれだけで即断はできない。また「心 (kardia)」という語にも留意すべきであろう。辞書や用例をみると、英語の heart にあたり、心情に力点がある語のようである。そして「心の清い者 [hoi katharoi tē kardia] は幸いである」（マタイ 5:8）のように、語として「清い」と相性がよい（ただしここでは「清い」は直接には「者」）にかかっている）ようでもあるからである。

## 六. 「魂」と「霊」

第三と第四の語義を私は方法的に分けてみたが、实例をみるとあまり意義はなかったように思われる。古代においては、「宗教感情」が他の感情と種的に区別されず混然となっているのがふつうであることから自然な結果かもしれない。ただ問題は引用9である。ここでは「霊と魂と体」の三つ組になっている。現れてくるのが、「霊」[pneuma]とは何かということである。キリスト教における「魂」の観念の把握には、「永遠の」ものとしての「命」の観念が伴うことをさきほどみたが、この「霊」についても同様である。そしてこれは『旧約』以来、ユダヤ人にとって重要な宗教的観念である。だが私達にとっては「魂」と比べても把握が難しい。多くの日本人には「霊」と言えば spirit よりも（「幽霊」という語でよりはっきり表される）ghostに近い観念であろう。「靈魂」という語は、「霊」よりも「魂」の同意語とされよう。（『岩波キリスト教辞典』で「魂」を引くと「靈魂」をみよと示されることもこれを裏付けていよう。）この小論ではしかし『新約聖書』での「霊」の語の詳しい検討は省く。外的制限のほかにも、それをある程度許す内在的理由はあると考える。旧約での「霊」は基本的に精神原理というより生命原理ととられているようなので、前者を目標とする今の考察からはずれるということが一つである。新約での「霊」は、人間の精神原理一般というより「聖霊」そのものやそれとの関連が重要そうで、キリスト教教義自体が第一の考察目標でないことがもう一つである。ただしこの捨象によって引用9の考察も省かれるというような短所もむろん生じる。ここでは「霊」が第五義の、つまり宗教性の強い「魂」を、「魂」がより一般的な「心の座」を意味するとさしあたり解してこの位置においた<sup>7)</sup>。

## 七. 主体としての「魂」

次に第六の語義を考えたい。ここでまず注目したいことがある。本論が依拠している聖書原文の書には、希英辞典が付されている。その *psychē* を引くと、第一に *self, inner life, one's inmost being* と、まさにこの第六の語義が出る。（この後に *life, living creature, person* のような他の語義が出る。）他の希英辞典はもちろんこうではない。そしてこの辞典は他の辞典からそのまま、あるいは略してつけたのでなく、あくまで『新約聖書』用に造られ、「より中心的で頻繁な意味が第一に与えられ」<sup>8)</sup> という方針が記されている。だがこの意味が最も「頻繁」というのは明らかに事実ではない。引用10とせいぜいあと引用2くらいしか挙げられない。ということはこの「辞書」は少なくとも著者の解釈がはいっている。おそらく、少なくとも私が「第五」の意味としたもの（の多く）を「第六」の意味を含ませて考えているのであろう。ともかくそれは解釈である。この二つの用例を除けば、新約の *psychē* が直接に「内面」や「内的自己」を意味しているところはない。よって外国語の意味を記す辞書にそれを中心的で頻繁な語義として示すことは勇み足であろう。それを敢てしたということは、新約の *psychē* と言えばその意味だ、という先入見が強いためではなからうか。そこから言えることが二つある。本稿の意図として、「内面の誕生」史<sup>9)</sup>において、キリスト教が重要な結節点であろうという見通しから、この語の考察に取り組んだ。図らずもこの辞書の記述に表れた強い成見は、この見通しが的外れでないことの傍証となる、というのが一

つである。もう一つは、キリスト教の「魂」とは「内的自己」のことでありその「救い」こそこの教えにとって本質的である、という観念が（聖書以後のキリスト教において）どのように成立したのか（たとえばアウグスティヌスにおいてはすでに強いこと<sup>10</sup>）などはただちに思い浮かぶが、という問いがあいかわらず残されているということである。この問いのなかには、そのような観念展開が、どの程度内在的な（聖書自体に本質的な根拠がある）ものでどの程度他の思想の影響によるものか、という検討を含む。本稿では検討そのものではなく、その方向性の自己提起にとどまらざるを得ない。内在的に、聖書の「魂」の語が「内面」の観念につながることを示すには、「良心」や「罪」の観念の検討が必要になろう。両者がパウロにおいて重要なことは言うまでもないが、イエスにおいてどうかは問題になる。「良心」については直接にはあまりイエス的ではない。「原罪」というとパウロ的であって実はイエス的ではないということはよく言われ、私もそう考えるが、神話的ないし神学的な「原罪」ならぬ「罪」の観念としては、イエスにおいても重要と考える。これについては次節でも考えたい。

## 八. 小結

キリスト教の「魂」観念ということで思い浮かべがちな「霊肉の実体的区別」が、しかしイエスにおいては確認できないことを前に述べた。辞書などでみたように、キリスト教の立場の現代の研究者にもそのようにみる傾向がある。そして「イエスにおいて」だけでなくそもそも「キリスト教において」そうであり、「実体的区別」はヘレニズム的観念であって聖書は全体しての「人間」を把握する立場だと主張したいように感じられる。憶測をまじえて言えば、これは価値自由な研究の進展によるだけでなく、「伝統的」キリスト教への反省にもよるのではなかろうか。すなわち、「伝統的」キリスト教が「魂」や「霊」の側に偏して肉体的、物質的な面を低く見てその弊害があったという認識、しかしこれは少なくともイエスの精神を正確に把握したものではなかったという認識、これ（私のような外部の者にとっても妥当と思われるが）にもよるものと思われる。そのうえで問題にしたいのは、しかしその意図が逆方向にいきすぎることはないのかという疑問である。すなわち「霊肉の事象的対立」は聖書においても認識されており、またそこでは「霊」「魂」「心」の側の優位が認められているのではなかろうか。だからこそ、ヘレニズムの影響においても、唯物論（ヘラクレイトス、デモクリトス、ルクレティウスなどの伝統）でなく観念論的二元論（プラトン<sup>11</sup>）や新プラトン主義）を取り入れたのではなかろうか。そしてこれが、伝統的には無論いまでも弊害を伴うとはいえ、新たな人間機械論や物欲に手放して肯定の経済成長主義に対して、有用な批判的観点をもたらすことを認めてもよいのではなかろうか。

福音書に、「霊肉の事象的対立」とそこにおける「霊の優位」があることについて、[引用 11] [引用 12] [引用 13] で示されているが、イエスの思想全体の問題として考えてみよう。すなわち「救い」「福音」「神の国」とは何かということになる。イエスは貧しい者にパンや魚などを与えており、確かにこうした経済的な「チャリティ活動」を観念的な「慈愛（アガペー＝チャリティ）」と切り離して軽視すべきではない。しかし「地上に富を積んではならない」（マタイ 6:19）のはもとより、何を食べようか、飲もうか、着ようか、の煩いは異邦人のもので、「何よりもまず、神



の国と神の義を求めよ」と言われる（マタイ6:25-33）。また彼は病気や障害の治療にもおおいに力を尽くしてもいる。しかしここで注意しなければならないのは、これらが当時「悪霊の働き」など罪障の観念と結びついていたことと、そのためその被害者は共同体から疎外されていたということである。よってイエスの治療は純粹な医療行為ではなく、罪障からの解放と共同体への復帰が特に問題にされていることである。彼はまずもって「悔い改めよ」と求める。彼がもたらす「救い」は、貧しさや病やローマの支配など（その苦しみに彼は共苦同情しつつも）からのものではなく、何よりも罪からの救いではあるまいか。これに関して、「悔い改め」の強調は一部の福音記者によるバイアスであり、「悔い改め」を「救い」の条件とする解釈はイエスの真意と異なるとする意見がある。無条件にしないと条件を満たせない者への差別になるが、イエスは「劣者」を劣者のままで救おうとしたのだという解釈である。確かにイエスは社会的な弱者や敗者に対して、「神の国」では彼等が強くなり勝者へと逆転するという「ルサンチマン」的救済を約束したのではない。このことはおおいに強調されるべきである。しかしそれは彼等が「棚からぼたもち」式に「無条件で」神の国に入ること、神や隣人への愛の意志（その成果ではない）も持たずに、上からか外からか、あるいは宿命ないし歴史的必然（「時満ちて」）かによって「救われる」ということではあるまい。「悔い改め」は「罪」の自覚を、つまり「内的自己」の直視を必要とする。ここにおいて聖書の「魂」が「内的自己」の観念に結びつく内在的な根拠がある<sup>12)</sup>。またこれがたとえば仏教における根本問題が、「罪」というより「苦」の克服であったことに示されるのと違い、内面性により強く結びつかせるゆえんであろう。なお念のためにことわれば、これは「罪」の問題であるがパウロ的な「原罪」の問題ではない。後者は神話的・神学的な観念として再び内面性や主体性の契機を後退させるのではないかと思われる。

#### [凡例]

本紀要の執筆規定により、ギリシャ語もローマ字で示し、慣用の変換を行った。

聖書からの引用は次により、篇名と章・節を本文中に示した。

*The Greek New Testament, Third Ed United Bible Societies, 1975*

邦訳は主に新共同訳を参考にしたが、必ずしも従っていない。

#### [注釈]

- 1) 『キリスト教辞典』岩波書店、2002、727頁。
- 2) 加藤和哉、同書、1212-1213頁。
- 3) Liddell and Scott, *Greek-English Lexicon (Abridged Edition)* Oxford, 1977
- 4) 速水敏彦（高橋虔・シュナイダー監修）『新共同訳 新約聖書注解Ⅱ』日本基督教団出版局、1991、410頁。
- 5) 大貫隆、『キリスト教辞典』95頁。
- 6) 同書、134頁。
- 7) なおギリシャ哲学の靈魂論（心理学）における *psychē* と *pneuma* に関しては、高橋濤子『心の科学史』講談社学術文庫、2016、が詳しい。
- 8) B. M. Newman, Jr., Preface (*A concise Greek-English Dictionary of the New Testament*)

- 9) 高橋滯子、前掲書も「“生命原理”としての古代・中世のプシュケーから“自我”ないし“内面的世界”としての近代的プシュケーへの移行がどのようにして起こったか」(11頁)という問題意識において、私とかなり重なっている。しかしこの書ではキリスト教は少なくとも直接には検討対象にしていない。そのこともあって、 pneuma とプシュケーの関係性に関する著者の観点(106頁など)についても私はさしあたり保留したい。
- 10) たとえば、「私には身体と魂があって、私に現存し、前者は外側に、後者は内側に存する。」 Augustinus, *Confessiones*, X -6
- 11) ただしプラトン自身において、魂の「永生」という観念はないという点について、E. Rohde, *Psyche*, Wissenschaft Buchgesellschaft, Darmstadt, 1961, S.264-265.
- 12) これに関してはプラトンよりもソクラテスが(もとよりこの関係性は難しいが)問題になろう。後者における内的自己あるいは道徳的主体としての psychē については、出隆『ギリシャ人の靈魂観と人間学』勁草書房、1967、82-84 および 102 頁、参照。初期キリスト教の形成にこのようなソクラテスの思想が影響したとは考えにくい。後の西洋思想一般では、この点での「ソクラテス－イエス問題」はさらに検討されるべきであろう。

## On the Idea of <soul>(psychē) in the New Testament

Yoichi NAKAJIMA

This paper aims to inquire into the idea of the <soul> in the New Testament through the analysis of the word <psychē> in it. The purpose is not to examine the authenticity of a Christian dogma, but to consider this idea in terms of Western thought in general.

This word in the New Testament has several meanings. Problematic is the use of soul as the spiritual principle.

Assisted by the study of the editorial history of the Bible, we see there is not the idea of <the soul as the immaterial substance> in <historical Jesus>. It can be assumed to enter into the dogma by the influence of the Greek dualistic philosophy. Contemporary theologians, reflecting their traditional bias for the idealism, seem to insist on understanding the human being as a whole. We can approve their intention, but it may still be true that the stress on the spiritual side by Jesus and the Apostles has, besides the affinity for the Platonism, a significance in our materialistic world.

**Key words** : The New Testament, Psyché (soul) , Christianity